

# Why notと How come

遠藤 喜雄

## 要旨

本稿では、英語の勧誘表現 why not (why don't you ～も含む) の特質と、理由を問う表現 how come にみる話者間のバリエーションを、日本語の対応表現を交えて論じる。特に、それらの構文の統語構造に焦点を当てるが、談話や語用にも配慮しながら、論を展開する。

キーワード：why not、how come、発話行為、勧誘表現

## 0. 序

本稿では、勧誘の発話行為を持つ表現 why not (why don't you ～も含む) と、主に口語において理由を問う際に用いられる how come の文に見られる特質を考察する。主に、これらの表現の統語構造に焦点を当てるが、談話や語用にも注意を払いながら、それらの性質を議論する。

本稿は次のように構成されている。まず、第1節において、本稿の背景を紹介する。次に、第2節で、why not に見る特質を考察する。さらに、第3節で、how come に見る諸特徴を概観した後で、その構文に関して、4つのタイプの話者が存在することを見る。そして、その4タイプのバリエーションがカートグラフィーの枠組みで捉えられることを見る。最後に、第4節において、全体をまとめる。

## 1. 背景

Ross (1984) 以来、否定表現は、移動に対する島 (negative island) を形成することが知られている。例えば、(1a) に見るように、wh 表現が文頭に移動する際、否定表現を飛び越すと非文法性が生じる。しかし、why は、同じ環境において、(1b) に見るように、否定の島の効果を持たない。

- (1) a. \*How didn't John fix her bike? (Shlonsky and Soare 2001: 656)  
 b. Why didn't John fix her bike?

日本語において、wh表現は、目に見える形で移動しないが、以下に見るように、英語と同じ否定の島の効果が見られる。つまり、否定文の中に英語のhowに対応する「どうやって」が生じると、(2a) に見るように非文法性が生じるが、英語のwhyに対応する「どうして」が生じて、(2b) に見るように、非文法性は生じない。

- (2) a. \*田中さんはどうやって忘年会に来なかったの(ですか) ?  
 b. 田中さんはどうして忘年会に来なかったの(ですか) ?

日本語では、目に見える形でwh表現が否定表現を飛び越えて移動していないのに、どうして英語と同じ否定の島に関する差が生じるのであろうか。本稿では、Watanabe (1992) や Endo (2007) に従い、日本語において、以下に図示するように、wh要素の位置からゼロ演算子 (Op) が、文頭に移動すると想定する。

- (3) [田中さんはどうやって忘年会に来なかったの] (ですか) ?



この考えによれば、日本語でも、上の図で、括弧で囲った否定の島の領域から、ゼロ演算子が移動すると、英語と同様に非文法性が生じることとなる。つまり、日本語と英語が同じく否定の島の効果を持つことが説明される。

では、なぜwhyは否定の島の効果を持たないのであろうか。Rizzi (2001) は、whyが移動を伴うことなく、基底から文頭のCP領域に生成されるとした。すると、whyには、否定を飛び越す移動がないために、否定の島の制約から自由となることが説明される。

日本語においては、whyに対応する「どうして／なぜ」が、移動を伴うことなく、文の外側に基底で生成されることが明示的わかる。この点を以下の例を

見ながら考察しよう。

- (4) a. 何を買った？ / 何を買いましたか？  
 b. どこで買った？ / どこで買いましたか？  
 c. ?なぜ / どうして買った？ / ?なぜ / どうして買いましたか？  
 d. なぜ / どうして買ったの？ / なぜ / どうして買ったのでか？  
 d'. [理由の階層 なぜ / どうして [文の階層 買った] の] ? / [理由の階層 なぜ / どうして [文の階層 買った] の] ですか？

(4a-b) では、疑問表現の「何」と「どこ」が、文末に「の」という要素を伴うことなしに疑問文が成立している。一方、(4c-d) の対比は、「なぜ」と「どうして」が、文末に「の」という要素を伴うことなしには、自然な響きの疑問文にはならないことが示されている。これは、(4d)に見るように、「なぜ」や「どうして」が、文末の「の」が形成する否定の外の領域で認可されることを示している。つまり、「なぜ」や「どうして」は、他の疑問詞とは異なり、文の外側に基底で生成されることが、日本語では、明示的に示されている。

以上、whyが他の疑問表現とは異なり、最初から否定を含む文の外側に基底生成されるため、否定を飛び越すことを禁ずる否定の島の制約を受けないことを見た。

この点を念頭において、本稿の主たる関心事のひとつである whyに関わる勧誘表現のwhy notやwhy don't youを見よう。(5)に見る、why notやwhy don't youという表現は、whyが否定の島に従わず、notの左に生じることが可能という性質を利用して成立している構文である。一方、英語には、why notに対応するような、how notやwhen notという表現はない。これは、howやwhenが移動を伴うため、notという否定の島を超えて、否定の左側に生じないためである。

- (5) a. Why don't you take an umbrella with you?  
 b. Why not take an umbrella with you?

## 2. Why not

本節では、前節で見た背景を念頭において、勧誘表現のwhy don't youやwhy notの特徴を考察する。

特徴1：why notやwhy don't youは、相手にある行為をするように誘導する勧誘の意味を持つ。

Why notやwhy don't youに見るこの勧誘の用法は、conductive questionやleading questionと呼ばれることがあり、話し手が聞き手を誘導する機能を持つ勧誘表現である。この勧誘表現は、否定の疑問文に見る語用論的な働きを利用している。ここでいう否定疑問文の語用論的な働きとは、「聞き手を誘導して、ある動作を勧める」という働きである。日本語でも、「ない」や「せん」などの否定要素を持つ疑問文（=6b）に、誘導／勧誘の意味が見られる。

- (6) a. 窓を開けますか？  
b. 窓を開けませんか？

(6a)の文は、話し手が聞き手に対して、窓を開けてほしいか否かを質問しているという点で、意味的にも疑問文である。そのため、窓を開ける人は、話し手でもかまわない。一方、(6b)に見る否定の疑問文では、聞き手に対して、窓を開けるように誘導しているという点で、意味的には疑問というよりは、勧誘の働きを持つ。そのため、(6b)の文を発する話し手は、聞き手が窓を開けるのことを期待している。つまり、聞き手に動作を促すのが、この種の誘導の疑問文の持つ発話行為（speech-act）の特徴である。

特徴2：Why notは、否定の意味を持たない勧誘表現なので、否定要素を求めるany（negative polarity item）等と一緒に生じることがない。

この特徴を、以下の例で見よう。

- (7) Why don't you have some/\*any ice-cream?（勧誘の意味）

ここでは、why don't youという文の話し手が、聞き手に対して、アイスクリームを食べるかを尋ねているのではなく、むしろ食べるように促しているという点で、肯定の意味合いを持つ。そのため、否定の要素や意味を求めるany等が生じると、非文法性が生じる。そのため、肯定に馴染むsomeが用いられる。この点は、久野・高見（2007）でも論じられている。

日本語では、「少しだけでも」という表現が、勧誘の文に生じる表現であると思われる。例えば、この「少しだけでも」という表現は、「少しだけでも食べた」という主張を表す文に生じると、不自然であるが、「少しだけでも食べて下さい」という勧誘を表す文に生じると、自然な響きとなる。この勧誘表現を求める「少しだけでも」を含む他の具体例を見よう。

- (8) a. ??少しだけでも飲みました。  
 b. 少しだけでも飲みませんか?  
 b'. 少しだけでもどうぞ。

(8a) に見る「～ました」という表現は、単なる肯定の主張を表わし、勧誘の意味を持たない。そのため、「少しだけでも」が生じると、不自然な響きとなる。一方、(8b) に見る「～ませんか?」という否定の疑問文は、(8c) に見る「どうぞ」と同様に、勧誘の働きを持つ。そのため、勧誘の文に生じる「少しだけでも」が、これらの文においては、自然に聞こえる。英語でも、(9a) に見るように、否定の疑問文だけで、勧誘の意味を表すことが可能である。しかし、否定疑問文に、否定の意味を求めるanyが生じると、(9b) に見るように、勧誘表現とは解釈されない。

- (9) a. Don't you want some ice cream? (= "Surely you do" = conducive question)  
 b. Don't you want any ice-cream? (= "Is it really the case that you don't want any ice-cream" = non-conductive negative question) (Andrew Radford 私信)

ここで、前に見たWhy not have some/\*any ice cream?という文を思い出そ

う。(7)の対比は、勧誘という肯定の意味と疑問を求めるanyの意味があわないことを示している。ここで注意が必要なのは、これらの文では、音韻的に、why が、後続する要素と異なる音韻単位を持って発音されると、anyが生じても文法的となる点である。

(10) Why [not have any ice cream] ?

この音韻的な特徴は、以下で詳しく論じる。

特徴4：Why didn't youという過去形は、聞き手を誘導する勧誘の意味に解釈されない。

この点を、以下の文を見ながら考察しよう。

(11) Why didn't you have some/any ice cream?

ここでは、didにより示される過去形が用いられており、この文は勧誘の意味を表現できないむしろ、この文は、単なる疑問文と解釈される。そのため、否定の意味を求めるanyが生じても文法的となる。つまり、過去形になると、勧誘の意味解釈が消えるのである。なぜ、過去形になると、勧誘の意味が消えるのであろうか。それは、勧誘という意味が、発話行為 (speech-act) を持つためである。発話行為とは、概略、話し手が発話すること自体が発話にまつわる行為となることを意味する。例えば、「おはよう」という発話は、挨拶をする行為となる。これを無理に過去にして、「おはようでした」とすると、「さっきは挨拶をするのを忘れていました」という言い訳の意味にしかならず、挨拶の意味とは解釈されない。同様に、コンパでおごってもらった後に、「ごちそうさまで～す」と言えば、感謝の発話行為となり、さらに、新潟方言では、物をもらった時に、「ごちそうさまです」と言えば、「ありがとうございます」と同等の感謝を表わす発話行為となる。発話をする行為は、発話する時点で成り立つものなので、すべて現在形の形をとる。これが、勧誘という発話行為が過去形で表わされない理由である。(同様に、「おはようございます」という表

現も、挨拶という発話行為に特化しているので、「おはようございました」と過去形にはできない。(ちなみに、「ごちそうさまでした。」は、過去形の形式を持つ。これには、「ごちそうさまです」という現在形の形式もある。前者の場合に、発和行為であるかを検証する必要があるが、それを確かめす方法が見あたらないので、この点は未解決の問題である。)

以上の点を、「少しだけでも」という勧誘表現と共に用いられる表現を見ながら確認しよう。この「少しだけでも」という表現は、「ませんか」等の現在形を持つ文にのみ生じることが可能であることを見た。そして、この「少しだけでも」という表現が、「ませんでしたか」という勧誘には解釈されない過去形の文に生じると、(11)に見るように、不自然な響きの文となる。

(11) ?少しだけでも飲みませんでしたか? (少しだけでも=勧誘を要求)

特徴5：勧誘のwhy notは、勧誘を表わさないwhy notと音韻の単位が異なる

whyとnotがひとつにまとまりとなる音韻の単位 (phonological unit) を形成すると、そのwhy notは勧誘に解釈される (= (12a) では、[why not] と表示することでそれらがひとつの音韻単位であることを表わしている)。一方、whyのみが音韻の単位を形成して、そこで一息置かれると、(= (12b) では、[why] [not...] と表示)、その文は、勧誘とは解釈されることはない。<sup>1</sup>

- (12) a. [Why not] [have some/\*any ice cream] ? (勧誘; 肯定の意味)  
 b. [Why] [not have some/any ice cream] ? (非勧誘; 否定の意味)

(12a) の文は、勧誘の意味を表し、意味的には疑問ではないので、否定の意味を求める表現anyが生じると容認されない英語となる。そのため、否定を要求しないsomeを用いる必要がある。<sup>3</sup> 一方、(12b) の文は、勧誘とは解釈されず、否定の疑問文と解釈される。そのため、否定の意味を求めるanyが生じてても容認される。

日本語では、動詞と「～せんか?」が隣接していないと、誘導型の勧誘の意味で解釈することが難しい。そのため、勧誘の意味を求める、「少しだけでも」

が生じると据わりの悪い文となる。

- (13) a. 少しだけでも飲みませんか? (=勧誘)  
b. ??少しだけでも飲みはしませんか? (=非勧誘)  
c. ??少しだけでも飲んだりしませんか? (=非勧誘)<sup>2</sup>

(13b, c) では、動詞「飲み」と「しませんか」が、助詞「は」や「だり」によって分断されている。そのため、この文は、勧誘とは解釈されない。そのため、勧誘を求める「少しだけでも」が生じると、響きの悪い文となる。

ここで、英語のwhy don't youを音韻単位の点から見よう。(14)に見るように、why don't youは、必ずしも、ひとつの音韻単位を形成する必要がない。例えば、whyとdon't youの間に、副詞表現if you don't mind me askingが挿入されても、その文は勧誘と解釈される。これを別の点から見ると、why don't youは単なるひとまとまりの熟語 (idiom) ではないと言える。

(14) Why, if you don't mind me asking, don't you have some ice cream?

(Andrew Radford私信)

以上、本節では、why don't youやwhy notに見る理由表現whyを用いた勧誘表現の特質を、5つの点から考察した。

### 3. How come

本節では、次の(15)の文に見る、how comeという理由を問う疑問文の特徴を探る。このhow comeという表現は、主に口語で用いられる。Google等で検索すると、Now, how come did you give those baby-sitters such a hard time?という主語と助動詞が倒置した形も見られることがあるが、以下で見る神田外語大学とエセックス大学の教員を対象にして行われたAndrew Radford氏との共同調査では、そのような倒置の形は容認されず、(15)に見る主語と助動詞が倒置しない形が容認される。How comeが主語と助動詞の倒置を持つ文は、学校教育を受けない話者にのみ容認されるようである。(主語と助動詞の倒置については、Collins 1991を参照)

(15) How come she has read the book?

さて、why notがwhy don't youからdoとyouを削除することで作られるのと同様に、how come ~にも削除が関与している。より具体的には、このhow comeという表現は、歴史的にはHow does it come that ~という複文の構造から出発しており、そこからdoesやitが削除されて、現在の単文の形になった。その歴史的な変遷は、以下のようにまとめることができる。

(16) how comeの歴史的な変遷

- (i) How does it come that...=>
- (ii) How ~~does~~ it comes that...=>
- (iii) How come it that...=>
- (iv) How come ~~it~~ that...

Richard Larson (私信) が指摘するように、現代の英語では、how come that ~という文は、古めかしく (archaic) 聞こえる。これは、おそらく、(ii) の時代の文を思い起こさせるからであろう。(ii) の時代とは、例えば、シェークスピア等に見るエリザベス朝の英語で、そこでは、(17) に見る how comes it という表現が見られる。

(17) How comes it that thou art then estranged from thyself?

(Shakespeare, The Comedy of Errors, II.2)

ここで注意すべきは、(ii) と (iii) が異なる時代の異なる形であるという点である。つまり、how it comesという (ii) の時代の文では、3人称単数の一致要素 -s が動詞につくが、(iii) の時代のhow come thatという表現には、3人称単数の一致要素 -s が動詞につかない。これは、(iii) の時代のhow come itという文においては、comeが屈折に関わるIP領域を経由せずに、howの生じるCPの領域に移動 (verb-raising) しているためである。この形から itが削除されたhow come that ~という (iv) の文は、現在生きている人が使う最も古い形式である。(例えば、Andrew Radfordの英語)

また、現代の英語では、comeがhowとひとつにまとまり、構成素をなす。そのため、howとcomeの間に、副詞的な表現が生じると、\* How, in your view, come the police has done nothing? に見るように、非文法性が生じ、in your viewは、comeに後続しなければならない。（Andrew Radford 私信）

ちなみに、日本語でも、(ii) の時代の英語と同様に、「どう (=how) ということ」というhow型の表現は、複文にしか生じない。

- (18) a. 来れないとは、どういうことですか？  
b. どうして来れないのですか？  
c. ? どういうことで来れないのですか？

(18a-b) では、「どういうこと」が広い意味での分裂文 (cleft sentence) の焦点 (focus) の位置に生じている。つまり、この文は、複文構造を持つ。この場合、「どういうこと」を無理に単文で副詞的に (18c) のような形で用いると、日本語では容認されない形になる。つまり、「どういうこと」は、複文にしか生じない理由を問う表現であり、その意味で、(16) の (i) の時代の英語に似ている。

以上の点を念頭において、以下では、how comeに見る話者間のバリエーションを、4つのタイプに分けて議論する。（この調査は、著者が神田外語大学の英語の教員を対象に、Andrew Radford が Essex大学の言語学科の教員を対象に行ったものである。）

タイプ I の話者：How comeにthatが後続する形を許す (Zwicky、Radford、Shlonskyを含む)

このタイプに属する話者は、少数で、以下に見るように、thatがhow comeのすぐ後ろに後続する文を容認する。このタイプの話者は少ない。例えば、次の文を見よう。

(19) How come [that she has read the book] ? (Zwicky and Zwicky 1973)

ここでは、補文標識のthatがhow comeのすぐ後ろに生じている。前節で見たように、この文は、古いHow ~~does it~~ come that …の形を持ち、that以下は、前提と解釈される。そして、このタイプの話者は、(20)に見るように、感嘆文でもthatを許す傾向がある。ここでも、thatは補文標識であるので、このタイプの話者は、感嘆文とhow comeの主文 (main clause) に補文標識を持てるのである。

(20) How quickly that people forget!

ちなみに、how come以下の内容が前提と解釈されるのと同様に、感嘆文でも、その内容は前提と解釈される。例えば(19)のHow comeの場合には、それに後続する事柄を前提にして、話し手が、その事柄の理由を問うという意味を表わす。一方、(20)の感嘆文の場合には、how quicklyに後続する事柄を前提にして、話し手が驚きを表すという意味を持つ。(これと幾分似た驚きを伴う理由を問う表現は、最近の日本語において耳にする(特に)若者言葉において、平板調で発音される「なんで」「どういうこと」という表現にも見られる。)

また、how comeにthatが後続することを容認する話者は、thatのない形も容認する。この場合、thatがある場合には、前提の解釈がより強く全面に押し出される。例えば、Fitzpatrick (2005)が議論するように、前提を表わす文には否定の要素を求める any が生じるのが難しいが、how come that ~という連鎖を許容する話者は、thatが生じた場合、このanyを持つ文を容認しにくいと判断する。逆に、thatがない場合、否定対極の any を持つより容認性が向上する。さらに、このタイプの話者は、通例は削除不可能とされるsubjunctiveのthatの省略も許す傾向にある。

タイプ II の話者 : How comeにthatが後続する形を許さない

(Kayne, Larsonを含む)

Richard Kayne (個人談話) が指摘するように、首尾一貫して how come の

後ろに補文標識の *that* が生じる文を容認しないタイプの話者がいる。つまり、次の文のような文を容認せず、常に、*that*のない形を用いる。

(21) How come [~~that~~ she has read the book] ?

このタイプの話者が一番多いが、次に見るように、*how come*と*that*の間に他の要素が生じると容認性が向上すると判断する話者も存在する。

タイプ III の話者：*how come*の後ろに副詞等が生じると、*that*が後続できると判断する話者（NyeやVermeulen等を含む）

このタイプの話者は、*how come*の後ろに副詞的な要素が生じると、その後ろに*that*が生じるのが自然に感じると判断する。例えば、次の文を見よう。

(22) How come, after a long drawn-out conflict, that the Israelis and Palestinians still haven't made peace?

ここでは、*how come* の後ろに副詞表現的 *after a long drawn-out conflict* が生じることで、その後ろに *that* が生じることが可能となっている。（この点については、Radford 2014 を参照のこと）さらに、このタイプの話者は、次に見るように、*how come* に後続する文の内容が長くなると、*that* が生じることがより自然に感じる傾向にある。

(23) How come that every time I try and download the program, the internet connection cuts out? (Rachel Nye 私信)

タイプ IV の話者：*How come*が埋め込み文に生じない話者（cf. Ochi 2004）

Ochi (2004: 34, fn.7) が報告するように、このタイプの話者は、次に見るような*how come* ～が埋め込み文に生じることを嫌い、*how come*が主文に生じる文のみを容認する。

(24) I wonder [how come that he hasn't blown the Hell up already]

以上、how comeにまつわる4種類の話者間のバリエーションを見た。以下では、この4タイプのバリエーションが、カートグラフィー研究 (cartography of syntactic structures) で想定されているCPを様々な機能範疇に分離する枠組みで容易に表わすことができることを見る。(カートグラフィー研究を用いたCP領域に関しては、インドヨーロッパ系の言語については、Rizzi (2004) を、日本語については、Endo (2007) や遠藤 (2014) を参照。)

まず、how come が生成される CP 領域の構成を見よう。Rizzi (1997、2004) は、CP領域が、以下に見るような詳細な機能範疇の階層構造を持つことを示した。

(25) Force Top\* Int Top\* Focus Mod\* Top\* Fin IP

このようにCP領域が分裂するのは、補文標識thatが入るForceと、通例toが入るFinの間に、トピックやフォーカス要素が生じる場合である。しかし、Rizzi (2003) は、ForceとFinの間に他の要素が介在すると、Finにもthatが繰り返し生じることを、以下の例によって示した。

(26) I think that, if they arrive on time, that they will be greeted. (Rizzi 2013: 209)

以上の背景を念頭において、タイプ I ~ IVの話者の持つ構造を見よう。まず、Rizzi (2001) の、how comeに相当するイタリア語のcome staiがIntの位置に生じるという考えを踏襲して、Shlonsky and Soare (2001) は英語のhow comeも同様に、IntPの指定部に生成されるとした。この考えは、how comeの直後に常にthatが生じる話者のタイプ I のパターンを説明する。How comeがIntというForceとFinの間に生じるのであれば、CP領域は、(25) に見るように分裂し、(26) に見るように、Finに that が生成されるので、how comeのうしろにthatが生じることを説明できる。

(27) … [IntP *how come* [FinP *that*… (タイプ I)

次に、*how come*の後ろに、*that*が生じない話者であるタイプ II を見よう。この話者は、*how come*がForcePの指定部に生成されるとするTsai (2008) の構造を持つ。Rizzi (1997) が示したように、ForceとFinの間に要素が介在しない場合には、ForceとFinは別々に存在しない、ForceとFinがいわば融合した構造(amalgamated form)を持つ。ForcePの指定部に*how come*が生成されると、FinがForceとは独立した構造を持ってないので、Finに*that*を生成することができない。つまり、*how come*の後ろに*that*を生成する場所がなく、Forceの主要部に*that*が重じるとdoahly filled comp filter違反となる。そのため、このタイプの話者は、*how come*の後ろに*that*を持ってないのである。

(28) … [ForceP *how come* [~~FinP~~ *that*… (タイプ II)

次に、タイプIIIの話者を見よう。このタイプの話者は、*how come*の後ろに介在する副詞等の要素があると、その後ろに*that*が生じることを許容する。これは、*how come*の後ろに介在する副詞等の要素があると、(25) に見るように、CP 領域が分裂するので、ForceとFinが別個に存在するためである。そのFinの指定部には、*that*が生じるのが可能なので、このタイプの話者は、*how come*の後ろに、副詞的要素、そしてその後ろに*that*を持つ文を容認する。

(29) [ForceP *how come*… [ModP *if they arrive on time* [FinP *that*… (タイプ III)

最後に、タイプIVの話者を見よう。このタイプの話者は、主文にしか*how come*を持ってない。これは、このタイプの話者が、*how come*を主文にしか生じない機能範疇に生成することを意味する。Haegeman and Hill (2014) は、そのような機能範疇として、ForcePの上に位置するSpeech-actPを提案している。この機能範疇は、発話行為を表わす要素のための範疇で、日本語でいえば、「来たね」に見る終助詞「ね」に相当する要素が生じる範疇である。日本語でも、「来る(\*ね) 学生」に見るように、終助詞を持つSpeech-actPは、埋め込まれ

た位置には生じない。つまり、how comeを埋め込み文に持てないタイプIVの話者は、このSpeech-actPの指定部にhow comeを生成する。

(30) … [Speech-actP *how come*… [ForceP … (タイプIV)

以上、本節では、主に口語で用いられるhow comeに見る話者間のバリエーションを、4つのタイプに分けて、それがカートグラフィー研究の想定するCPの考えにより、以下に見るように捉えられることを見た。

(32) <タイプA>… [IntP *how come* [FinP *that*…<sup>4</sup>  
 <タイプB>… [ForceP *how come* [~~FinP~~ *that*  
 <タイプC>… [ForceP *how come*… [ModP *if they arrive on time*…  
 [FinP *that*…  
 <タイプD>… [Speech-actP *how come*

ここで新しい点は、話者間のバリエーションが、はじめてカートグラフィー研究において表わされている点にある。つまり、本稿の後半は、カートグラフィー研究が、同一言語における話者間のバリエーションを表現することも可能であることを示す新しい試みである。

#### 4. まとめ

以上、本論では、英語の勧誘表現のwhy notに見る5つの特徴を探り、次に、how comeに見る話者の間のバリエーションを考察した。後者については、このバリエーションを、カートグラフィーの観点から解明することを目指した。英語の理由を問う表現には、whyとhow comeの他にも、what…forに見るwhat型の形式もある。この点については、Endo (2015)を参照のこと。

#### \*謝辞

本稿は、2014年10月にベネチア大学で開催されたワークショップVariation in C: Macro- and micro-comparative approaches to complementizers and the CP phase、2014年11月に学習院大学で開催された日本英語学会第32回大会における招聘研究発表、および2014年12

月に新潟大学で開催された新潟大学言語学講演会における招待講演の一部に加筆および修正したものである。以下の方々からは、貴重な意見をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい：秋孝道、Guglielmo Cinque、中本伸輔、Richard Kayne、蔵藤健雄、Richard Larson、榎田裕加、中島平三、田中秀和、Andrew Radford、Luigi Rizziおよび上記の催しでコメントや質問をして下さった方々。

<sup>1</sup> 久野・高見 (2007: 93) も why が否定の意味を表していると、否定要素を求める any が生じることが可能となる事例として、以下の例を挙げている。

(i) Why buy anything special for Mary?

(どうしてメアリーに特別なものを買うの？買わない方がいいよ)

<sup>2</sup> 「少しだけでも飲んだりしませんか？」を、「少しだけでも飲んだりしてみませんか？」にすると、容認性が改善されるように感じられる。これは、おそらく、前者の「し」が補助動詞であるのに対して、後者の「してみる」に見る「し」が動詞であるため、「してみませんか」が勧誘表現となっているためと思われる。その詳細は、未解決の問題である。

<sup>3</sup> 統語的にも、why と not がひとまとまりの構成素をなすなら、not が any を c-command しないので、any が認可されない。

<sup>4</sup> もし Int の存在により Force と Fin が分裂するのであれば、タイプ I の話者は、how come の前にも、Force の主要部に that を持つことで、that how come ~ という文が可能となることを予測する。実際、Radford (2014) は、以下に見るそのような文が、Google で検索すると、見いだされることを報告している。

(i) a. My gripe is that how come audacity can easily get the audio input but not skype?

b. What I'm saying is that how come other cities look so bright like new york and seoul and other big cities. (Andrew Radford 私信)

しかし、Andrew Radford (私信) が指摘するように、これは母語話者の英語ではない。では、どのような英語か。Plann (1982) は、スペイン語では that に相当する que が para qué 'for what' といった wh 要素の前に生じることが可能であることを指摘している。同じ現象として、Saito (2012) は、日本語でも、「来る-か-と」に見るように疑問の助詞の後ろに「と」が生じることを基に、ForceP の上に ReportP という機能範疇を想定して、そこに スペイン語の que や日本語の「と」が生成されるとする。すると、上の問題の英文は、通例の場合に使われることがない ReportP に英語の that をスペイン語のように想定している話者によると考えることができる。

## Appendix

Endo (2015) で議論されているように、英語では、whyとhow comeに加えて、さらにwhatにより表現される理由を問う次の疑問形式がある。

(i) What are you coming to the United States for?

類型論的には、whatに対応する表現で、理由を問う表現は、多くの言語に見られる。日本語では、「君は、何を笑っているの」に見る表現がそれに相当する。英語では、比較的自由に、whatを用いて理由を表わすことができるが、日本語では、典型的には、「笑う」に代表される非能格 (unergative) の動詞に限られる。一方、「来る」に見る非対格 (unaccusative) の動詞では、(iia) に見るように座りの悪い文となる。(iib) に見る「やって来る」という表現は、意志を表わす非能格である可能性が高い。

(ii) a. ??君は何を来たの？

b. 君は何をそんなに汗を流しながら (やって) 来たの？

本間伸輔氏 (私信) が指摘するように、(iib) の語順を変化させると、次に見るように、据わりの悪い表現となる。

(iii) ??君はそんなに汗を流しながら何を (やって) 来たの？

(iib) に見る文では、「汗を流しながら」と「(やって) 来る」で複合的な意志を持つ非能格の述語が形成されているように思われる。

この種の構文には、「何を」に見るように、対格の「を」が生じる。この対格の付与に関しては、Chomsky (1995) の考えが参考になる。Chomskyによれば、対格の付与は、次の構造で、v という機能語により行われる。

(iv) [vP v [VP V]]

また、Chomskyによれば、v は動作主 (Agent) という意味役割がその指定部に付与される。「来る」という動詞自体は、その主語に動作主の意味を付与しない。つまり、vを持たないが、こ

の「来る」が「汗を流しながら」と隣接することにより、再構造化（restructuring）が生じ、vを持つことが可能となり、それに連動して、対格の「を」の付与が可能となる。そして、(iii)に見るように、「来る」が「汗を流しながら」と隣接しない場合には、再構造化は生じない。

再構造化に隣接性が求められることは、英語でも知られている。例えば、Chomsky（1981）は、dependとonが能動態の文において、再構造化されないので、その間に副詞が生じることが可能であることを示した。

(v) John depends heavily on Mary.

一方、受動文では、dependとonに再構造化が生じるため、その間に副詞が生じると、再構造化が不可能となり、非文法性が生じる。

(vi) \*Mary was depended heavily on by John.

このように、問題の「何を」は、動詞が再構造化される場合も含めて、述語全体が意志的な動作性の意味を表わす場合に、生じることが可能となる。

また、本間伸輔氏（私信）が指摘するように、次に見る、述語が形容動詞を持つ文でも、理由を問う「何を」が生じることが可能となる。

(vii) 君は何をそんなに熱心なの？

ここでは、「熱心」という意味が、熱心に行動するという意味を持つ点に着目しよう。つまり、ここでは、「熱心」が意志を持って行う意味を持つことにより、vを持つことが可能となる。その結果、「何を」が認可される。その証拠に、「そう」という要素を加えることにより意志を持つ動作というよりは状態の側面を強調すると、次に見るように、「何を」は、据わりが悪くなる。

(viii) ??君は何をそんなに熱心そうなの？

そして、この構文は、進行の意味が求められる。例えば、次に示すように、起動や終結のアスペクトを強調して、動作を背景化すると、座りが悪い文となる。

- (ix) a. 君は何をそんなに泣いているの？
- b. ??君は何をそんなに泣き始めたの？
- c. ??君は何をそんなに泣き終えたの？

このように、vは進行の動作を前景化 (foregrounding) することにより生じることが可能になる。そして、述語が表わす動作を前景化することは、(xi) に見るように、副詞によっても可能であるように思われる。

- (x) ??何を来ているの？
- (xi) 何をそんなにはやく来ているの？

この (xi) の文では、到着する動作がその意味に含まれているため、「何を」を含む文の据わりが良くなるように思われる。

ちなみに、vがその補部に求める意志的な動作という意味は、自発という意味と整合しない。例えば、「壊す-壊れる」に典型的に見られる自動詞 vs. 他動詞の交替を持つ自動詞では、自発の意味が前面に出されるので、理由を問う「何を」は生じない。

- (xii) \*このパソコンは何をそんなに早く壊れるの？

この場合、次の文に見るように、「ようとする」という要素を加えることにより、意志的な動作性を表わすことができる。すると、それと連動して、アニメのように、物でも意志を持った動作をする状況が創造できる場合には、問題の「何を」は可能となる。

- (xii) このパソコンが何をそんなに早く壊れようとするの？

最後に、「何を」と感情表現の関係を見よう。

- (xiii) 君はそんなに納豆が／??を嫌いななの？

この「嫌い」は状態性を意味し、対格の「を」が生じることが不可能となっている。一方、次に見る「嫌う」は、意志性の意味を持ち、対格の付与が不可能となる。

(xiv) 君はそんなに納豆を嫌うの？

これと連動して、「嫌う」を持つは、「何を」が生じることが可能となる。

(xv) 君は何をそんなに納豆を嫌うの？

## 参考文献

- Chomsky, N. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Collins, C. 1991. Why and how come, 31-45. *MIT working papers in linguistics* 15, 31-45.
- Endo, Y. 2007. *Locality and information structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Endo, Y. 2012a. Illocutionary force and discourse particle in the syntax of Japanese,” *Modality and theory of mind elements across languages*, eds. by W. Abraham and E. Leiss, 405-424, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Endo, Y. 2012b. The syntax-discourse interface in adverbial clauses, *Main clause phenomena*, eds. by A. Lobke, L. Haegeman and R. Nye, 365-384, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Endo, Y. 2015. Two ReasonPs. In *Beyond functional sequence*, 220-231. Oxford: Oxford University Press.
- 遠藤喜雄. 2014. 『日本語カートグラフィー序説』 東京: ひつじ書房.
- Fitzpatrick, Justin. 2005. The Whys and How Comes of Presupposition and NPI Licensing in Questions. In *Proceedings of the 24th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. John Alderete et al., 138-145.
- Haegeman, L. and V. Hill 2014. Vocatives and Speech Act projections. In *On peripheries*, eds. by Cardinaletti, G. Cinque, and Y. Endo, 209-236, Tokyo: Hituzi.
- 久野暉・高見健一. 2007. 『謎解き英文法：否定』 東京：くろしお出版.
- Lasnik, H. and M. Saito. 1992. *Move  $\alpha$* . Cambridge, MA: MIT Press.
- Obenauer, H. 2006. Special interrogatives. In *Romance language and linguistic theory 2004*. John Benjamins.
- Ochi, M. 2004. How come and other adjunct wh-phrases: A cross-linguistic perspective.

*Language and Linguistics*, 5 (1), pp. 29-57.

Plann, S. 1982. Indirect questions in Spanish, *Linguistic Inquiry* 13: 297-312.

Radford, A. 2014. How come questions with *how come* are different? Ms. University of Essex.

Ross, J. 1987. Islands and syntactic prototypes. *Papers from the general session at the Twenty-Third Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*.

Rizzi, L. 1990. *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.

Rizzi, L. 2001. On the Position 'Int (errogative) ' in the left periphery of the clause. In *Current studies in Italian syntax: Essays offered to Lorenzo Renzi*, eds. by G. Cinque and G. Salvi, 267–96. Amsterdam: Elsevier.

Rizzi, L. 2013. Notes on cartography and further explanation." *Probus* 25:197–226.

Saito, M. 2012. Sentence types and the Japanese right periphery," in G. Grewendorf and T. E. Zimmermann, eds., *Discourse and grammar*, 147-175. Berlin: Walter de Gruyter.

Shlonsky, U., and G. Soare. 2001. Where's 'why'? *Linguistic Inquiry* 42: 651–69.

Tsai, W.-T. D. 2008. Left periphery and *how-why* alternations. *Journal of East Asian Linguistics* 17: 83–115.

Watanabe, Akira. 1992. Subjacency and S-structure movement of wh-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 255-291.

Zwicky A. and A. Zwicky. 1973. How come and what for. In *Papers in honor of Henry and Renée Kahane*. <http://www.stanford.edu/~zwicky/how-come-and-what-for.pdf>.